3歳で漢字 小4で英検準1級——いま「選択的登校」

才能の光と影 1

IQ154 小学校が苦しくて

もうすぐ、夏休みが終わる。新学期が始まるときは気持ちが沈む。

学校には週に何度か行く。行かない日は美術館に行ったり、パソコンで映像作品を作ったり。

学校のルールになじめずに泣き、悔しい思いをしてきた。そうして、見つけたのが「選択的登校」だ。

都内の小学5年生、小林都央さん(10)は、体調や時間割をみて週3日ほど学校に行く。都央さんにとって学校は「ありのままの自分でいられない場所」だ。

ヘアドネーション（髪の寄付）のために2年間伸ばしていた長い髪。トイレに入ると、「なんで女子が入ってくるんだよ」と言われた。好きな組み合わせで左右違う色の靴下をはくと、「おかしい」といじられた。

漢字は3歳ごろから路線図で読めるようになった。初めて書いた字は「品川」だった。フォントやピクトグラム（絵文字）に興味を持ち、歯車のおもちゃで遊ぶのも大好きだった。

幼稚園の頃には分子や元素の図鑑を読み、小学4年で英検準1級（大学中級程度）に合格。英語と日本語を操るバイリンガルだ。昨年開かれた小学生向けのプログラミング大会では、4年生で決勝に進出した。

母の純子さんが異変を感じたのは、幼稚園の頃。日曜日の深夜に嘔吐することがあり、幼稚園での集団生活がストレスになっているようだった。夜にうなされることもあり、ドッジボールがある日は体調が悪そうに見えた。

周囲から「ギフテッド」の存在を教えてもらったのは、そんなときだ。

知人に勧められ、小学1年の時に都央さんのIQ（知能指数）を調べたところ、154だった。平均の100程度と比較して、大幅に高い数値だった。

学校は、苦しいことの連続。算数の答えの求め方は教えられた以外のやり方はダメ。黒板に書かれた通りにノートへ書き写さないとダメ。みんなと同じようにしないと叱られ、泣いて帰宅することもあった。ざわざわした教室にいるだけで疲れ果てた。

登校するのがしんどい日とることにした。美術館や博物館に足を運んだ。体調が良かったり、気分が向いたりするときは、学校に行く。そうして、登校する日を自ら選ぶ「選択的登校」を確立していった。

純子さんは、先生に都央さんの個性を説明する手紙を書いた。ギフテッドのことを勉強してくれ、スクールカウンセラーの理解も得ることができた。

ただ、都央さんは「学校に行かないといけない必要性や義務は理解している。でも、本音を言うと好きじゃない」とこぼす。

都央さんが今熱中しているのは、パソコンで作る3Dの映像作品だ。作曲したり、デザイン画を描いたりすることもある。「自分が興味のあることをしている時が一番ワクワクする」

純子さんは「人と違う個性を持っていることが誇り」と感じるようになった。「足が速い、絵が上手と同じように、個性の一つとしてとらえてほしい」

（阿部朋美）

「神から授けられた」という意味の英語が語源の「ギフテッド」。飛び抜けた才能はその「光」の強さの分だけ、「影」も濃くなります。当事者や、支える人たちの思いを伝えます。

自分で考えた漢字の法則について解説してくれる小林都央さん＝東京都

機械式時計の仕組みを書いた本を熟読していた3歳の小林都央さん＝純子さん提供

才能ゆえの悩み 国もフォロー

飛び抜けた才能を持つ子どもたちの支援は、どのように行われてきたのか。

1998年から千葉大など一部の大学で、高校2年修了時に進学できる「飛び入学」が認められた。一方で、才能があるからこその悩みを抱える子がいることもわかってきた。授業が退屈で不登校になったり、対人関係が苦手でいじめられたりするケースだ。

文部科学省は昨年、こうした特定の分野に才能がある子を支援するため、有識者会議を立ち上げた。

会議では、選抜した子に特定のプログラムを提供する英才教育は「ラベル付けにつながりかねない」として、行うべきではないとの意見が大半を占めた。

文科省は来年度から具体的な支援に乗り出す。困難を抱える子のために、学習プログラムを展開するNPOなどの情報を提供し、教員が理解を深めるための研修も充実させる。

（伊藤和行）